

旭川市神楽岡公園とその周辺の植物

成田 一芳*¹・塩田 惇*²

1 はじめに

神楽岡公園は、常磐公園、春光台公園、忠和公園とともに旭川市総合公園の一つで、市内から近いことで花見や紅葉狩、自然観察、森林浴、歩くスキーなどさまざまな形で市民に利用され親しまれている緑のオアシスである。自然林が広がる公園は、北彩都に隣接する緑の空間として市民にとって貴重な財産となっている。「旭川みどり21の会」では、この貴重な自然の現状を把握しておくことが将来に向けて必要であると考え、植物調査を実施したのでその結果を報告する。

2 神楽岡公園とその周辺の概要

神楽岡公園は、市中心部から南東約3km、神楽岡の台地の北西部に位置し、市道神楽岡通線（プラタナス通り）と忠別川左岸との間に広がる緑地で、一部は市道（環状線）によって分断されている。現在の総面積は約41ha、標高は150mほどで地質時代の十勝岳火山を起源とする火砕流堆積物が分布している。

公園の沿革を時系列的にまとめるとおおむねつぎのとおりである。

- 1914年（大正3年） 公園を建設するため御料林を帝室林野局から借用し開園
- 1923年（大正12年） 公園用地として払い下げを受ける（上川神社建立）
- 1926年（大正15年） 道路、広場などを造成し、エゾヤマザクラ1000本を植栽
- 1949年（昭和24年） 公園として都市計画決定
- 1987年（昭和62年） 公園全体を「都市緑化植物園区域」「自然生態観察公園区域」「一般公園区域」に区分し、整備を始める
- 1997年（平成9年） 整備完了

公園の環境は、1987年から1997年までの11年間にわたる整備によって大きく変化した。一般公園としての機能充実を図ったほか、広い自然林を有する特徴を活かして森林の維持・利用を図る区域を明確に示した。また、緑の普及を推進するために各種の展示施設が設置された。各区域の概況はつぎのとおりである。

「自然生態観察公園区域」の大部分は、台地上にあってカシワ、ミズナラ、ヤチダモ、ハンノキなどの大中径木が林冠を形成し、後継樹の小径木や幼樹も多い広葉樹の複層林である。林床はクマイザサの占有度が高い。台地は平坦であるが粘土質の強い土壌の影響を受けて、湿性土壌を好むヤチダモ、ハンノキ、バイケイソウが群生しているのが特徴的である。

「一般公園区域」は、忠別川左岸の河川敷から低い段丘が連続し湾状を呈したところ

*1 旭川みどり21の会 *2 旭川帰化植物研究会

で、河岸林に多く生育するハルニレ、ミズナラ、ドロノキ、カツラなどの大中径木により形成されている広葉樹単層林である。後継樹となる小径木等は植栽木以外にはなく、地表は徹底した草刈りによって管理されている。人の踏みつけに強いオオバコ、ヒナギクが広い範囲に生育しているほか、ニリンソウが大きな群落を形成している。山沿いの凹地にはミズバショウなどの水性植物も見られる。なお、1926年に植栽されたエゾヤマザクラについては現存を確認することができず、ほぼ同時期のものと思われる老木が10数本残っているに過ぎない。台地と低地との間の急斜面は大中径木をまじえた広葉樹林で、林床にはシダ類や大型草本が多く生育している。

「都市緑化植物園区域」には緑の相談所のほか針葉樹園、広葉樹園、ツツジ園、生垣園、ロックガーデンが設置されている。

なお、公園に隣接する河川敷は、忠別川左岸の低水敷で「一般公園区域」の一部と駐車場が含まれている。駐車場に面した区域は大部分がほぼ裸地に近い河原となっている。その上流はせり出している台地との間の狭い河川敷は主に高茎草本類で占められ、下流はヤナギ類を中心とした小面積の河畔林と人工草地になっている。

神楽岡公園に関連した植物調査には、つぎのような記録がある。

- 1890年（明治23年） 北海道長官第二代永山武四郎時代に動植物、鳥類調査
（記録は未確認）
- 1962年（昭和37年） 高柳 昭男（旭川市立東光中学校）
「旭川市神楽岡公園及びその附近の植物予報」旭川市郷土博物館
- 1970年（昭和45年） 稲垣 貫一（北海道教育大学旭川校）
「神楽ヶ岡の植物」
- 1977年（昭和52年） 柴田直臣（上川神社宮司）
単行本「神楽岡公園の自然」刊行
- 1999年（平成11年） 高柳 昭男（元旭川市立聖園中学校長）
「旭川市神楽岡公園の植物」旭川市博物館
- 2008年（平成20年） 旭川帰化植物研究会「旭川の帰化植物」第34報

3 調査方法

調査は2008年と2009年の2年間にわたって実施した。2008年は5月18日、6月20日、7月15～16日、18日、9月8～9日、11日、10月6日、11月5日、11日、2009年は4月21日、6月4～5日、8月21日、9月14～15日、10月19日まで延べ18日間行った。調査は「旭川みどり21の会」の会員によって行われ延べ191人が参加したほか、一部は市民も参加した。調査の方法は、園路周辺を中心に林内・河川敷を踏査し、目視した植物（植栽樹も含む）の種類について記録した。

まとめに当たっては、「植物目録」のほか高柳が1999年に報告した「旭川市神楽岡公園の植物」と現在の植物種との変化、希少種、帰化種について記述した。なお、「都市緑化植物園」に植栽されている樹木については、「植物目録」の末尾に付記した。

4 調査結果

調査の結果、公園から387種、隣接する河川敷から189種、あわせて92科449種が記録された。詳細は「神楽岡公園とその周辺の植物目録」のとおりである。配列は、環境庁自然保護局編「自然環境保全基準調査植物目録」（1994）などに基づいた。

4-1 神楽岡公園における植物種の変化

前出の高柳の報告は、1996年から1998年の3年間にわたって、公園の花の咲く植物（種子植物）を対象に調査した記録である。調査の時期が公園の整備が完了（1997）する前後にあたっていることや調査の方法に多少の違いはあるが、10年あまりを経過しているため、今回の調査で記録した449種のうちシダ類21種と河川敷にのみ記録された62種を除いた366種と当時の植物種を対比して変化を調べた。その結果、高柳が報告した総数75科283種のうち、今回も記録できたのは223種で60種は記録されなかった。一方、新たに記録されたものは、つぎの51科143種であった。

【マツ科】 ヨーロッパトウヒ、アカエゾマツ、プンゲンストウヒ、モンタナマツ、ヨーロッパクロマツ、キタゴヨウ、ヨーロッパアカマツ【ヒノキ科】 シノブヒバ【イヌガヤ科】 ハイイヌガヤ【ヤナギ科】 ヤマナラシ、ネコヤナギ、エゾノバッコヤギ、エゾヤナギ、オノエヤナギ【カバノキ科】 ケヤマハンノキ、ウスゲヒロハハンノキ、ダケカンバ、ウダイカンバ、サワシバ【ブナ科】 アカナラ、クリ【ニレ科】 コブニレ【タデ科】 ソバカズラ*、オオツルイタドリ*【ナデシコ科】 オランダミミナグサ*、オオミミナグサ、ツメクサ、カラフトホソバハコベ*、ミヤマハコベ、【アカザ科】 シロザ【マツブサ科】 チョウセンゴミシ【キンポウゲ科】 キクザキイチゲ、アズマイチゲ、エゾカラマツ【スイレン科】 スイレン【ウマノスズクサ科】 オクエゾサイシン【ケシ科】 チドリケマン、エゾキケマン【アブラナ科】 ヤマタネツケバナ【ベンケイソウ科】 ツルマンネングサ*【ユキノシタ科】 アジサイ、フサスグリ*、イワガラミ【バラ科】 ヤマブキショウマ、エゾサンザシ、ヘビイチゴ、エゾノコリンゴ、ズミ、キジムシロ、オオヘビイチゴ、ニワウメ、ミヤマザクラ、シウリザクラ、カスミザクラ、セイヨウナシ、エゾイチゴ【マメ科】 シロバナシナガワハギ*【フウロソウ科】 ミツバフウロ【ミカン科】 キハダ【ウルシ科】 ツタウルシ【カエデ科】 アカイタヤ、イロハモミジ、オオモミジ、ヤマモミジ、ノムラカエデ【モチノキ科】 ハイイヌツゲ【ニシキギ科】 ツルウメモドキ、ニシキギ、コマユミ、ツルマサキ、オオツリバナ【クロウメモドキ科】 エゾクロウメモドキ【シナノキ科】 モイワボダイジュ【アオイ科】 ムクゲ【グミ科】 ナツグミ、アキグミ【スマイレ科】 スミレ【アリノトウグサ科】 アリノトウグサ【アカバナ科】 ウシタキソウ、ミズタマソウ【ミズキ科】 フイリミズキ【ウコギ科】 ケヤマウコギ【セリ科】 オオバセンキュウ、シヤク、ミツバ【イチヤクソウ科】 ギンリョウソウモドキ、イチヤクソウ【ツツジ科】 ハクサンシヤクナゲ、ヤマツツジ【モクセイ科】 チョウセンレンギョウ、イボタノキ、ミヤマイボタ、ハシドイ【アカネ科】 オオバノヤエムグラ【ムラサキ科】 ノハラムラサキ*、エゾムラサキ【シソ科】 ニシキゴロモ、ヤマクルマバナ、チシマオドリコソウ*、ホトケノザ、エゾシロネ、ツルニガナ【ゴマノハグサ科】 サギゴケ、ビロードモウズイカ*、コテングクワガタ*【スイカズラ科】 カンボク、ミヤマガマズミ【キキョウ科】 ツルニンジン【キク科】 ゴボウ*、ヒナギク*、コヤブタバコ、フランスギク*、

ハルジオン*【ユリ科】ドイツスズラン*、カタクリ、エゾキスゲ、ムスカリ*、オオアマナ*、シオデ、オオバタケシマラン【ヒガンバナ科】スイセン*【イグサ科】クサイ、ヌカボシソウ【イネ科】コヌカグサ*、オオスズメノテッポウ*、イワノガリヤス、メヒシバ、アキメヒシバ、イヌビエ、シバムギ*、イブキヌカボ、オギ、ヌカキビ、ミヤコザサ、ハイドジョウツナギ【カヤツリグサ科】ミノボロスゲ、ショウジョウスゲ、アオスゲ、オニスゲ、ミヤマジュズスゲ、ヒロバスゲ、ヒカゲスゲ、オオカサスゲ

注) *は帰化種(逸出を含む)を示す。河川敷の記録は含まない。

4-2 希少植物

今回記録した植物種の中で、環境省及び北海道が作成したレッドデータブックによりリストアップされている種に該当するものはつぎの6種である。いずれも公園内で記録している。

環境省のレッドデータブック(2007)による絶滅危惧種

チドリケマン(ケシ科) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

北海道レッドデータブック(2001)による絶滅危急種・希少種

フクジュソウ(キンポウゲ科) 絶滅危急種(Vu)

オクエゾサイシン(ウマノスズクサ科) 希少種(R①a)

カラフトイバラ(バラ科) 希少種(R①ab②c)

ハイドジョウツナギ(イネ科) 希少種(R①ab②b)

オニスゲ(カヤツリグサ科) 希少種(R①ab)

注1) 絶滅危惧種: 絶滅の危機に瀕している種または亜種

注2) 絶滅危急種: 絶滅の危機が増大している種または亜種

注3) 希少種: 存続基盤が脆弱な種または亜種

4-3 帰化植物

今回の調査では、外国から入ってきて野生化した植物のほか、栽培したものが逸出している場合も帰化植物として扱った。

記録した帰化植物の総数は19科79種で、植物総数449種に対する帰化率は17.6%であった。そのうち、公園は50種で帰化率12.9%、河川敷は60種、帰化率31.7%であった。河川敷の帰化率が公園より高い率を示したが、帰化植物は荒地や河原など環境が荒れた土地に好んで侵入することが知られている。忠別川における帰化率については成田ら(2004)が約29%と報告をしており、今回の調査でもそれに近い数値が得られた。公園の帰化率が12.9%と低いのは、公園面積のおよそ半分は広葉樹複層林の森林で自然度が高く、帰化植物が侵入しにくい環境が保たれていることをあらわしている。帰化種の中ではオオハンゴンソウが林縁や園路沿い、植生の薄い林内などに生育範囲を拡大してきている。

環境省は、外来生物が国内の自然に悪影響を及ぼすのを防ぐために2004年に外来生物法を制定し、「特定外来生物」を選定した。さらに「要注意外来生物」としてリストアップしている。

今回の調査記録から特定外来生物(2006年2月1日指定)に該当するのはオオハンゴンソウ(キク科)1種で、要注意外来生物(2005年8月1日発表)にはつぎの21種を

確認した。

【タデ科】エゾノギシギシ【アブラナ科】ハルザキヤマガラシ【マメ科】ハリエンジュ
【アカバナ科】メマツヨイグサ【オオバコ科】ヘラオオバコ【キク科】ブタクサ，アメリ
リカセンダングサ，アメリカオニアザミ，ヒメムカシヨモギ，ヒメジョオン，ハルジオ
ン，ブタナ，オオアワダチソウ，アカミタンポポ，セイヨウタンポポ【アヤメ科】キシ
ョウブ 【イネ科】カモガヤ，シバムギ，オニウシノケグサ，ホソムギ，オオアワガエ
リ

5 おわりに

旭川市は、「緑の基本計画」によって緑の将来像を示しているが、神楽岡公園は、外国樹種見本林、常磐公園とともに「緑化推進重点地区区域」となっている。現時点では具体的な施策はとられていないが、公園としての機能を発揮しながら、自然生態系の保全、森林のもつ景観機能の形成など、森と人が共生する環境づくりが求められている。

神楽岡公園は、都市開発が進む中で緑が豊かな自然空間として高く評価されてきた。それはカシワ、ミズナラ、ヤチダモなど大径木が多い自然林の存在が大きく寄与している。最近では単に緑地というだけではなく、鳥類・小動物・昆虫といった生物とくに森林性の生き物との関係に注目されている。また、隣接する河畔林や数年後にオープンする北彩都の公園・生態階段、さらには旭川市博物科学館が事業展開している「野外自然観察空間」などとも深い係わりをもっていて、「緑の回廊」の拠点として神楽岡公園の果たす役割は今後ますます重要視される立場にある。

神楽岡公園の管理については「自然林の環境を維持しつつ、公園としての機能を果たす」という点で、行政・市民が共有しているコンセプトであろう。自然林の環境維持という視点では、今後、適正な林分管理に努めるとともに、公園全体の緑の質を高めるため規律ある植樹の推進、巨木・老木など個々の樹木の適切な管理、過度な草刈りの抑制などの取り組みが望まれる。また、帰化植物の侵入に対しては注意深く観察を続けていく必要があり、中でも特定外来生物であるオオハンゴンソウについては繁殖状況を定期的に把握し、必要に応じ除去するなどの対策が講じられるべきである。なお、湿性土壌を好むヤチダモ、ハンノキ、バイケイソウなどが生育している区域については、クマイザサの侵入が拡大していることから土壌の乾燥化傾向が伺え、今後の植生の変化に注目していきたい。